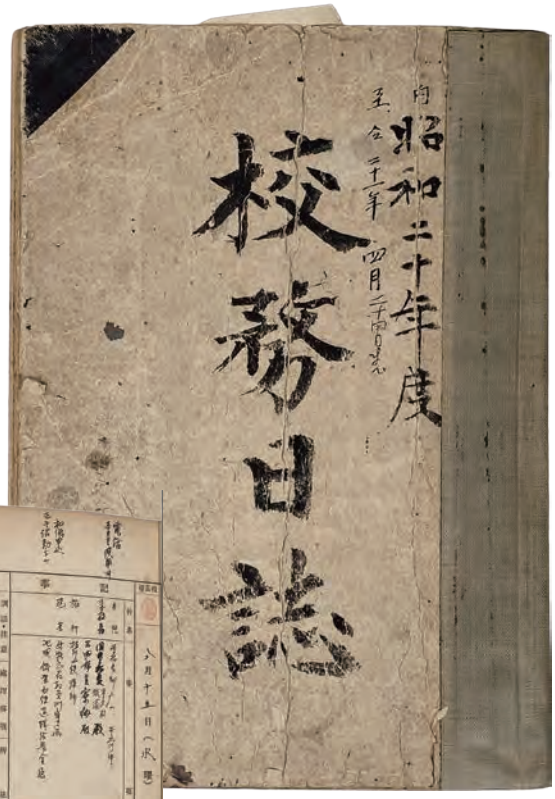
ISSN 2187-1841
千代田区立日比谷図書文化館

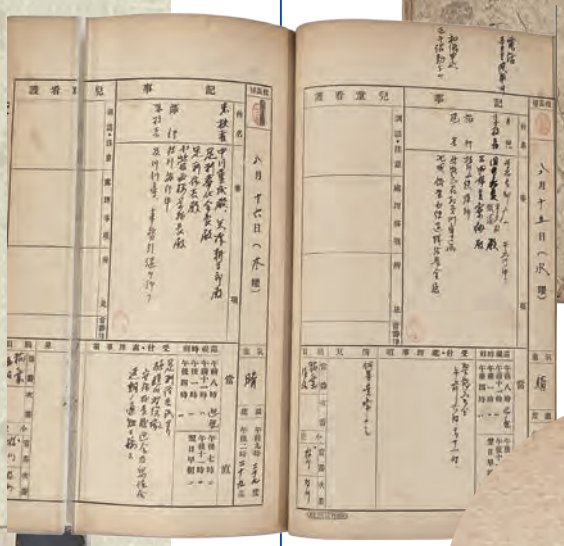
# 文化財ニュース

38 Spring 2026

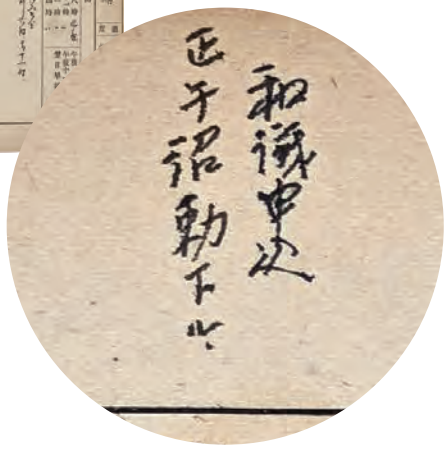
## 特集
## 千代田区における歴史的公文書の活用

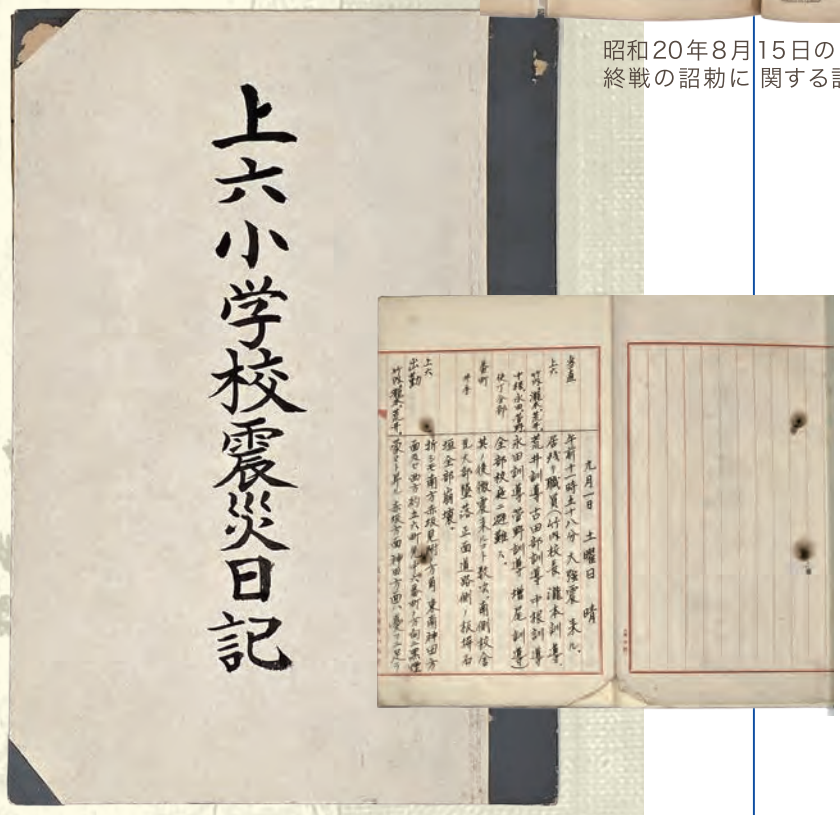



「昭和二十年度　校務日誌」
（千桜国民学校）



昭和20年8月15日の
終戦の詔勅に関する記録






「上六小学校震災日記」

## Index

2-3　特集
千代田区における歴史的公文書の活用

4-5　埋文 *News*
東京層を知っているかい（貝）？

6-7　*Chiyoda* コレクション
作家の直筆原稿

8　文化財事務室通信
令和8年度年間スケジュール（予定）

特集

# 千代田区における歴史的公文書の活用

近年、関東大震災100年、昭和100年といった節目の年が続いています。千代田区ではこれらの節目の年に合わせて展覧会を開催し、機運醸成に努めてきました。

ところで、展覧会は近現代をテーマにしたということもあり、展示資料として千代田区が保存している公文書も一部取り扱いました。すでに指定文化財になっている公文書の活用を除けば、こうした公文書の活用は、近年少しずつ増えてきた取組みです。今後も近現代に関する展示企画の開催が見込まれるため、公文書の活用機会はますます増え、かつ、重要になってくることが考えられます。

そこで今回は、千代田区で進む公文書の活用の現状について紹介したいと思います。

日比谷図書文化館特別展のチラシ

## 公文書とは?—千代田区の歴史的公文書—

国や都道府県、区市町村などいわゆる役所の職務の中で作成される文書は、原則「公文書」と呼ばれています。公文書は、国や各自治体が定める、「文書管理規程」などに基づき、適切に保存管理を行っており、千代田区も同様です。ちなみに、平成23年(2011)には、公文書の管理について定めた法律「公文書等の管理に関する法律(平成21年法律第66号)」が施行されており、公文書の管理については国を挙げて年々体制が整えられつつあります。

さて、この法律の中では、歴史資料として重要な国の公文書等を「特定歴史公文書等」と定義しています。千代田区では、膨大な公文書のうち特に千代田区役所の歴史や地域で起きた出来事などに関して記された歴史的に価値を有するもの、いわば「歴史的公文書」を展示活用しています。

## 活用事例1　関東大震災を記録した公文書

関東大震災発生後の様子を記録する淡路尋常小学校と錦華尋常小学校の大正12年の日誌

区内の公立学校でつくられた文書も公文書の1つになります。令和5年(2023)の特別展「首都東京の復興ものがたり」では、関東大震災に関する区内の人々の詳細な被災状況を知るための資料として、展示利用をしました。

関東大震災は、大正12年(1923)9月1日に首都圏を中心に、近代史上最大の被害をもたらした災害です。区内でも揺れによる木造家屋の倒壊や、その後に発生した火災によって、甚大な被害を受けました。区内における詳細な被災状況を知る際には、当時の公文書が活用できます。

例えば、淡路尋常小学校では、当時の教員が震災当日の様子を記録した日誌が残っています。揺れの被害は瓦が一部落ちる程度で少なかったようですが、周囲から火が延焼し、校舎建物3階部分が焼失してしまいました。先生方は、天皇の御真影を避難させたり、重要書類を持ち出したりなど、様々な対応に動いていたようです。展示では、学校日誌に記された震災直後の学校の様子を紹介することで、震災下の混乱の中での学校をめぐる人々の動向を明らかにしました。

## 活用事例２　戦時下の区民の生活を記録した公文書

左から、東郷国民学校、千桜国民学校、西神田国民学校の記録。疎開までの準備状況や、疎開先での生活について、児童の記録が残されています。

こちらも、太平洋戦争中に公立小学校で作成された公文書になります。昭和16年（1941）に始まった太平洋戦争は、次第に戦局が悪化し、昭和19年（1944）からは、日本本土も度々空襲を受けるようになりました。そこで、日本政府は、同年6月に「学童疎開促進要綱」を定め、国民学校の初等科３～６年生を対象に学童疎開を進めました。旧麹町区の児童は山梨へ、旧神田区の児童は埼玉へとそれぞれ疎開しました。

当時の公文書には、疎開の指示についての文書に始まり、疎開に向けて対応する教員の記録や文書が綴られています。どこに疎開すべきか、疎開にはどのような準備が必要か、疎開先での生活はどうだったのか、これらが当時の公文書に記録として残され、戦時下に暮らす人々の生活の一端を知ることができます。

こうした疎開資料は、これまで平成7年（1995）の「戦時下のくらしと子供たち」、平成27年（2015）の「学童疎開からみる子どもたちの生活」といった展示において、戦時下の子供たちの暮らしを知るための資料として活用されてきました。最近では、国際平和・男女平等人権課が毎年企画している春や夏の平和イベントなどでも、展示され、平和学習のための資料としても活用されています。

春の平和イベントでの活用風景

## 活用事例３　千代田区の成り立ちを記録した公文書

千代田区役所が保存する戦後千代田区が誕生した頃に関する公文書です。令和8年（2026）2月まで開催していた特別展「昭和100年 THE SHOWA MUST GO ON」でも、昭和時代の歴史の1つとして、千代田区の成り立ちを紹介する資料として活用しました。

千代田区は、旧麹町区と旧神田区が合併し、昭和22年(1947)3月15日に誕生しました。戦後の民主化政策の一環として、地方制度の改革が行われ、東京都の35区は22区の特別区として編成されることになりました。戦災により失われた公文書もありましたが、残ったものは旧2区から千代田区へ引き継がれ、新たな行政がスタートしました。千代田区が誕生してから3年目には、区歌と区の紋章を決めるために区内在住者とその関係者を対象にした一般公募が行われました。※　当時の公文書からは、こうした区のはじまりの歴史を知ることができます。

旧神田区から引き継がれた公文書

応募された区の紋章案
全部で277通の応募があり、最終的に86番が選ばれました。

首都東京の中心にある千代田区は、日本の政治をめぐる様々な出来事や事件の舞台にもなり、近現代の重要な歴史を刻んできた場所です。そのため、千代田区の保存管理している歴史的公文書は、日本の歴史を知る上でも重要かつ貴重な資料でもあります。現在、文化財事務室には、公文書の取り扱いを熟知した専門家である認証アーキビストの資格を有する学芸員も配置しています。今後も引き続き、歴史的公文書も活用しながら、千代田区や区民が歩んできた歴史を、様々な角度から解き明かし、紹介していきたいと思います。

（学芸員　山田将之）

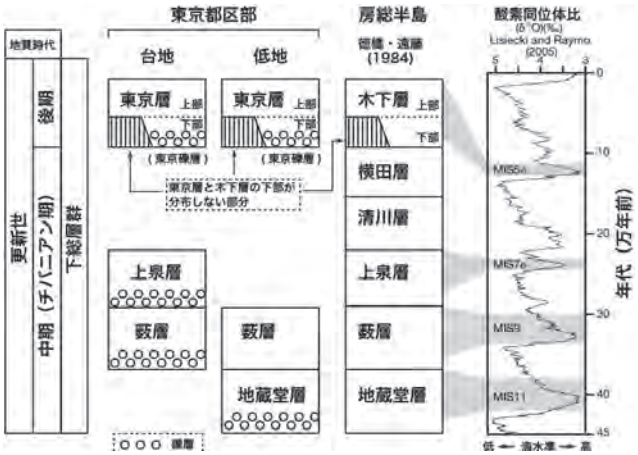
※区歌は一等が無かったため、後日、佐藤春夫作詞、山田耕筰作曲で制作されました。

# 東京層を知っているかい（貝）？　13万年前、関東平野は海だった

## 東京層とは

皆さんは、「東京層」という地層を知っていますか？「東京層」は、いまから約13万年前に海水準変動の影響により堆積した、更新世（258万8千年前から11,700年前まで）の砂・粘土・シルト（砂状の粒子の粗い土で構成される粘土）などで構成される地層です。標高の高い台地上であれば、現在の地表面から約10mから15m下から見え始める地層です。1911年に矢部長克（ひさかつ）が提唱した「Tokyo　Series」という地層（Yabe1911）は、1929年に地質学者である大塚彌之助によって「東京層」という名称で紹介されます（大塚1929）。

近年、産業技術総合研究所によって、東京の地質が再検討され（納谷ほか2021、納谷・中澤2021）、従来まで東京層とされてきたものには、層相（地層の見た目の特徴）の記載・テフラ（火山灰）分析・珪藻（水域に広く分布する単細胞の藻類）分析によって、千葉県の地層を模式地とする「下総層群」を構成する複数の「層（地層を区分する単位の一つ）」に対比できることが分かってきました（図1）。更新世における気候変動に伴い現在よりも海水準が高い時期がありました。貝化石が都内で見つかる理由は、関東平野に海の範囲が繰り返し広がっていたためです。産業技術総合研究所による研究では、複数層存在する海で堆積した地層のうち、後期更新世の海水準が高い時期に形成されたものを東京層として整理しています（納谷ほか2021、納谷・中澤2021）。東京層・下総層群に相当する地層は、区立清水谷公園での発掘調査においても、確認されています（写真1）。




【図１】　東京層と下総層群の対比
納谷友規・中澤努2021「東京都区部の台地を構成する地層の層序―東京層と下総層群―」
GSJ地質ニュース10（7）pp153-158より引用

## 東京層・下総層群に含まれる貝化石

ところで東京層・下総層群に貝化石が含まれていることは、区内をはじめ都心部で確認されてきました。いままで確認された更新世の貝層について、区内を中心とする主だったものを図2に示しました。開発に伴って確認されたものが多いようです。古い記録では、1881年に、日本で研究をしていたドイツ人の地質学者ブラウンスによって、田端・品川・神田川北岸の露頭で貝層が確認され、それぞれに含まれている貝種について比較されています（Brauns 1881）。神田川露頭の貝層は、『千代田区史（上）』（1960年）でも改めて紹介されており、貝化石には、ウラカガミ、ハマグリ、イヨスダレなどが含まれているようです（貝塚1960）。

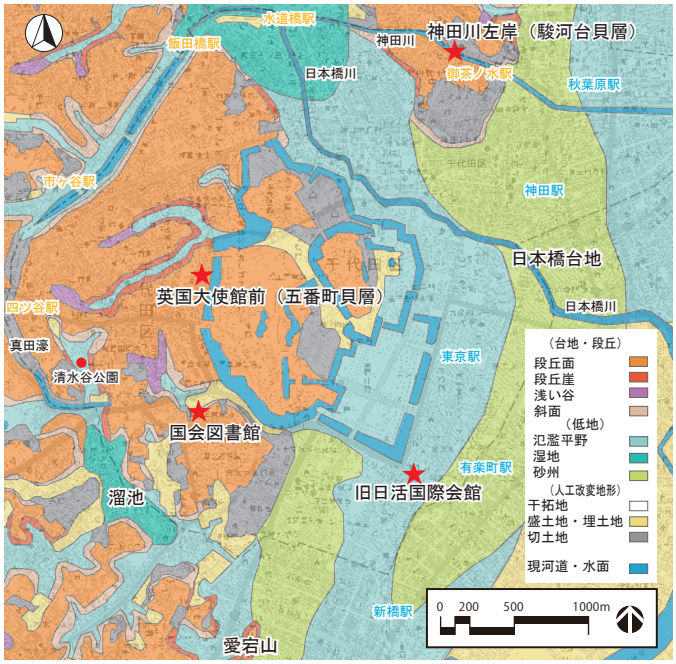
【写真１】　清水谷公園内の地層
T.P.16 ～ 13m 付近の様相

1932年には、英国大使館入口から半蔵門前までを通る青葉通りでの下水管埋設工事で貝層が確認され（大塚1932）、大塚彌之助により「五番町貝層」と命名されました（発見地の現在の町名は一番町）。貝化石には、イタヤガイ、ハマグリ、イヨスダレなどが含まれているようです。その後も1952年に日活国際会館の工事で貝化石が発見され、早稲田大学の古生物学者である直良信夫によって分類されました（国立歴史民俗博物館2008）。貝化石には、エゾタマキガイ、サラガイなどが含まれています。

1970年代も、国立国会図書館の工事で貝化石が確認され、国立科学博物館や地質標本館（産業総合技術研究所）で保管されています。貝化石には、エゾタマキガイやカガミガイが含まれています。以上の貝層は東京層なのか、下総層群なのかまだ分かっていません。今後の研究の進展が待たれます。

## 東京の化石、その名も「トウキョウホタテ」

最後に更新世の貝化石のうち、東京の化石とされている「トウキョウホタテ」についてご紹介します。トウキョウホタテ*Mizuhopecten tokyoensis*（Tokunaga, 1906）は食用のホタテガイに近縁の絶滅二枚貝です。1906年、徳永重康によって北区王子貝層の標本をもとに提唱され、東京にちなんで種小名は*tokyoensis*と命名されました（Tokunaga1906）。本種は昭和40年代頃まで、武蔵野台地東端の露頭、石神井川や神田川沿いの露頭、鉄道工事の現場など都内各地で採取されてきました。2016年には日本地質学会によって「東京都の化石」に選ばれることになります（川辺ほか2018）。




【図２】　区内で更新世の貝化石が確認された位置

トウキョウホタテの特徴は、現生のホタテガイに比べて放射状の肋（ろく）の数が少ないことです。トウキョウホタテが確認できるエリアは、北海道南部から九州、済州島、台湾にかけてです。時期としては、鮮新世（533万2千年前から258万8千年前まで）から更新世の地層から確認されています。トウキョウホタテは更新世に絶滅しており、文化財ニュース33号でご紹介した完新世（11,700年前から現在まで）の地層である「有楽町層」には含まれることがありません。

【写真２】　日活国際会館から見つかったトウキョウホタテ
早稲田大学考古資料館所蔵　直良信夫コレクションより

2018年に文部科学省の川辺文久らによって、都内で確認されたトウキョウホタテについて報告事例や保管状況について整理されています。いまのところ、区内でトウキョウホタテが確認されている地点は、日活国際会館だけです（写真２）。東京都内を広くみても都市化が進み、かつてのように「東京層」や「下総層群」が見られる露頭のほとんどが消滅しているため、更新世の貝化石を目にすることが難しい状況です。そのなかでも、絶滅種のトウキョウホタテなどの貝化石は、はるか昔に都心部のほとんどが海面下であったことを示す資料として貴重であり、多くの方に知っていただきたい貝化石です。　（学芸員　濱口皓）


引用文献
Brauns, D., 1881 “Geology of the environs of Tokio.” Memoirs of the Science Department, Tokio Daigagu, no. 4.
貝塚爽平 1960「一　千代田区の自然　I地勢」『千代田区史（上）』pp3-41.
川辺文久・中島礼・加瀬友喜・田口公則・佐々木猛智・守屋和佳 2018「東京都区部産のトウキョウホタテの産出記録および標本保管」GSJ 地質ニュース 7 (3) pp67-79.
国立歴史民俗博物館 2008「直良信夫コレクション目録」 国立歴史民俗博物館資料目録 7
大塚彌之助 1929「大磯地塊を中心とする地域の層序に就て ( 其一 )」地質学雑誌 , vol.36, no.433, pp.435-456, pl.17.
大塚彌之助 1932「京市麹町區五番町英國大使館前青葉通地下 15 米に於ける貝層」貝類学雑誌ヴヰナス, 3, pp109–112.
納谷友規・中澤努・野々垣進・中里裕臣・鈴木毅彦 2021「第四章　下総層群」
『都市域の地質地盤図「東京都区部」』pp15-38.
納谷友規・中澤努 2021「東京都区部の台地を構成する地層の層序 - 東京層と下総層群 -」
GSJ 地質ニュース 10(7) pp153-158.
Yabe, H., 1911 “A new Pleistocene fauna from Tokyo, with a general statement on the Pleistocene deposits of Tokyo, Japan.” Geological Magazine, 8, pp210–217.
Tokunaga, S., 1906 Fossils from the environs of Tōkyō. Journal of the College of Science, Imperial University of Tokyo, Japan, 21, pp1-96.

# 作家の直筆原稿

千代田区では江戸時代の戯作などの版本は、「江戸の出版文化」の一部として常設展示室で紹介しています【図1】。しかし、近代以降の文学作品については、資料はあるものの、これまで紹介の機会があまり多くありませんでした【図2】。そこで今回は、所蔵資料の中から研究資料としても特筆されることの多い作家の直筆原稿についてご紹介します。

【図１】曲亭馬琴『南総里見八犬伝』の展示風景（令和８年１月撮影）

【図2】山崎又三郎『大岡政談阿半長右ヱ門実記』、明治21年頃

## 直筆原稿とは

改めて直筆原稿、或いは自筆原稿・手稿とは、作者が直接原稿用紙などに文章や図画を認めたものを示します。直筆原稿からは手書きの癖や改稿の過程などを直接見ることで、編集を通していない作品完成直後の様子を知ることができます。また、筆致や執筆時の喫煙習慣といった作家の個性などを観察することができます。そのため、作家や作品の研究資料として非常に高い価値を有していると言われています。

本来原稿は、発表・出版されれば破棄してしまっても構わないものです。そのため、作家の直筆原稿は研究的価値だけではなく骨董的価値もあります。中世以降はコレクションの対象とされ、現在は文学作品だけではなく漫画原稿なども直筆原稿として注目されています。

このような複数の理由から特に近代以降の作家の直筆原稿は収集・保存に注力され、新しい発見があると世間の注目を浴びます。直近では令和８年2月3日に詩人・中原中也の直筆原稿が見つかったことが神奈川県立神奈川近代文学館から発表されました。

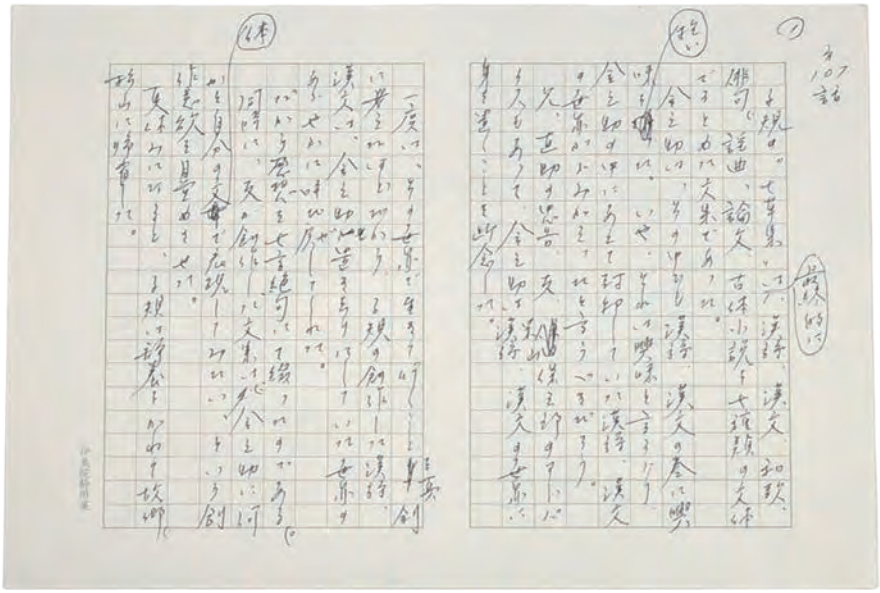
【図3】邦枝完二直筆原稿

## 邦枝完二（くにえだかんじ）「毒薬と壺」

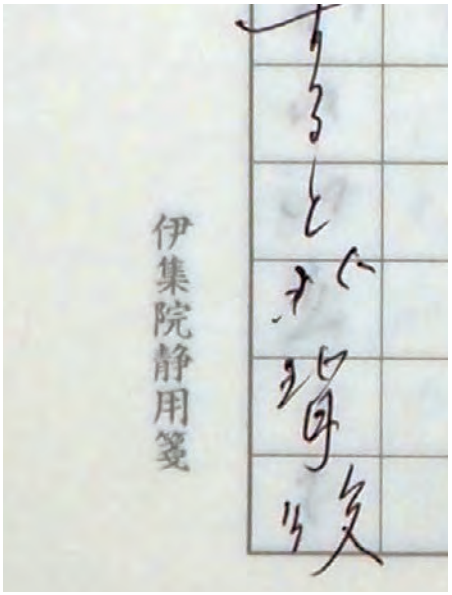
邦枝完二（1892−1956）は、麹町区麹町（区画整理後は四丁目）に生まれ、長く区内に在住した作家の一人です。戦前には戯曲・随筆など様々な作品を発表し、とりわけ画家・小村雪岱（せったい）が挿絵を手掛けて連載された『おせん』など江戸情緒を描いた作品で有名です。本資料は区ゆかりの作家の作品として収蔵しました。

この直筆原稿は没後に発行された短編集『恋一筋』に収録された「毒薬と壺」の一節です。【図3】この話は駿河台周辺を舞台とした作品で、実在の小説家・田澤稲舟（たざわいねぶね）（1874−1896）の心情と季節の移ろいが丁寧に描写されています。

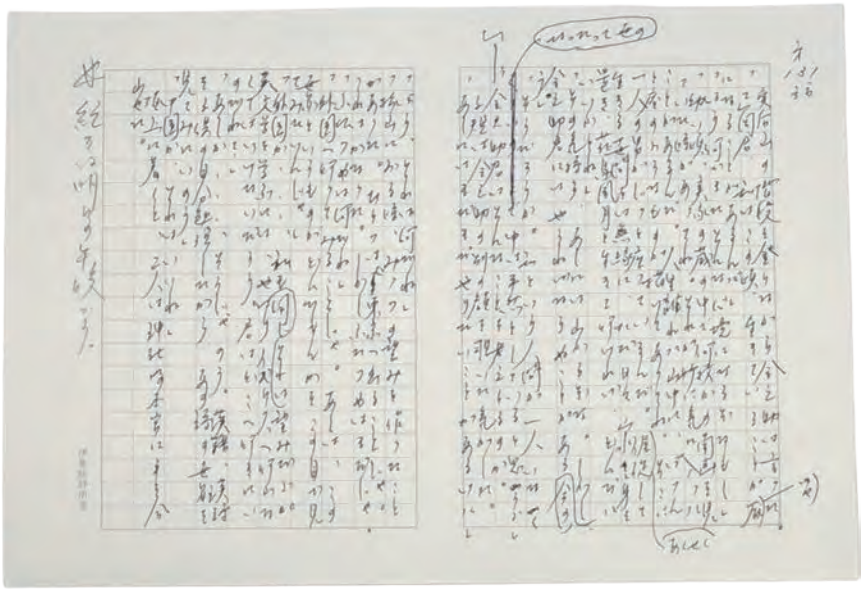
上掲の駿河台の情景を著した部分を見ると、誤字以外は一切の澱みや推敲がなくペンが走っています。晩年の邦枝は藤沢で過ごしていましたが、幼少の頃から親しんだ千代田区の風景ゆえに迷いなく書き進めることができたのではないかとうかがえます。



【図4-1】伊集院静直筆原稿




【図4-3】拡大



【図4-2】伊集院静直筆原稿
左上枠外には編集者へのコメントが鉛筆で書かれています。

伊集院静（1950-2023）の『ミチクサ先生』は令和元年（2019）9 月から令和 3 年（2021）7 月まで途中 9 か月の休載を挟みながら、日本経済新聞の朝刊で連載された夏目漱石の評伝です。この休載は、作者がくも膜下出血に倒れたため、空いた期間です。

実はこの原稿は生前の作者自身から寄贈されたものです。本資料の場合は作品の執筆環境が区内の山の上ホテルだったことや、作品の舞台として区内の風景が描写されていることなどから、収蔵しました（※文化財ニュース 27 号の「こんなこともやっています」掲載の整理中の資料がこの直筆原稿です）。

注目すべき点として、使われている原稿用紙の左下に「伊集院静用箋」という印刷があり、作家専用の用紙であることが挙げられます【図 4-3】。夏目漱石など近代の文豪が自分専用の用紙を刷っていたことは有名ですが、現代作家でも用いていたこと、そして電子機器へ入力して原稿を作ることが主流となり原稿用紙への執筆機会が失われつつあることなど、この直筆原稿には作品の内容以外にも興味関心を惹く情報が含まれています。

近年、原稿を手書きで書く機会は少なくなり、作家の推敲や創作の癖を知る術は失われつつあります。私たちがこの文化財ニュースに掲載する原稿も、パソコンを使って打ち込んで作っており手書きを行うことはありません。今後、直筆原稿の代替となった入稿データをどのように保存していくのかも、大きな課題となっています。　（学芸員　井坂綾）

文化財事務室通信

# 令和8年度年間スケジュール（予定）

4　5　6　7　8　9　10　11　12　1　2　3

## 特別展・企画展

29(土)　18(日)

特別展「発見された東京の化石」(仮)

6(土)　22(月)

企画展「7つのテーマでたどる ちよだの歴史・文化遺産」(仮)

## 常設展

通年

20(火)　20(日)

テーマ展２
「あの人も千代田区を歩いた
～夏目漱石～」（仮）

出典：国立国会図書館
「近代日本人の肖像」

16(火)　14(日)

テーマ展３
「竹久夢二の
スクラップブック」（仮）

16(火)　18(日)

テーマ展１
「地中から見つかった
動物たち」（仮）

都営地下鉄 ●三田線 ―「内幸町駅」徒歩3分
東京メトロ ●千代田線
●日比谷線 ―「霞ヶ関駅」徒歩5分
●丸ノ内線

駐車場　当施設に駐車場はありません。

| | | |
|---|---|---|
| 開館時間 | 月～金 | 10時～22時 |
| | 土 | 10時～19時 |
| | 日・祝 | 10時～17時 |
| 文化財事務室 | 月～金 | 10時～18時 |

文化財ホームページ

※特別展・企画展の観覧時間は異なる場合があります。
最新情報はホームページ等でご確認ください。

休館日　毎月第3月曜日


文化財ニュース　第38号　(3,000部)

発行日　令和8年3月31日

編　集　千代田区立日比谷図書文化館　文化財事務室
〒100-0012　東京都千代田区日比谷公園1-4
TEL:03-3502-3348 FAX:03-3502-3361
https://www.edo-chiyoda.jp

発　行　千代田区教育委員会

印　刷　株式会社報光社